

短期海外留学経験が就職・進路に関する意識に与える影響について： 帰国後インタビューからの考察

新見 有紀子（一橋大学法学研究科）

【要旨】

グローバル社会に対応する人材を育成するため、留学の促進と、留学経験者に対する就職・進路支援充実のための知見が求められている。また、OECD等の統計による日本人の海外留学者数はピーク時の2004年から大幅に減少したが、協定校等における比較的短期の留学者数は増加傾向にある。本稿では、オーストラリアにおける1ヶ月の短期海外留学経験が、参加者の進路や就職に対する意識にどのように影響を与えたのか、留学後に実施したインタビューを質的に分析した。その結果、短期海外留学参加者は、(1) 海外生活に対する自信の獲得による海外への心理的抵抗の弱まり、(2) 海外生活を通じた海外・国内に関する志向の吟味、(3) 現地での他者との交流による自己理解の深化、という3つの面で、就職や進路に対する意識に影響を受けたことが明らかになった。インタビュー結果を踏まえ、短期海外留学参加者に対する効果的な就職・進路支援の方策にも言及する。

【キーワード】 短期留学、就職・進路、キャリア、グローバル人材、意識の変化

1. はじめに

グローバル化の進展とともに、世界で活躍できる人材の育成が重要課題となる中、首相官邸は2013年に発表した「日本再興戦略」の中で、2020年までに日本人の海外留学者数を12万人に増やすという目標を掲げた（首相官邸，2013）。文部科学省がOECD等の統計を元に集計した2012年の日本人の海外留学者数は60,138名であったが、ピーク時の2004年における82,945名と比べて大幅に減少した（文部科学省，2015）。その一方で、日本学生支援機構が集計を行っている日本と諸外国の大学間協定等に基づく日本人留学生の数は増加傾向にあり、2004年度の18,570名から、2013年度には45,082名となった（日本学生支援機構，2006，2015）。中でも、1ヶ月未満の留学は2004年度の5,924名から、2013年度には25,526名に増加し、2013年度の交流協定等に基づく留学者数全体の半分以上を占めていた。2011年度から日本学生支援機構が、協定校等における3ヶ月未満の短期留学に対する支援を始めたことも、短期留学者数の増加に寄与していると考えられる。

短期留学のメリットについて、宮本（2012）は、短期留学は長期留学に比べて、経済的負担が比較的軽く、授業や就活などのスケジュールに影響を与えにくく、英語力の要件も様々であり、長期留学では対応しきれないニーズを満たすことができるという点を指摘する。さらに短期海外留学

は、その後の長期留学のステップになるという役割も期待されている（宮本，2012；野水・新田，2014）。参加者の学びや成長に寄与する短期海外留学プログラムを開発・実施するために、さらなる調査が求められている。

大学では、近年の早期離職者や若年無職者の増加を受け、在学中に学生自身が主体的に職業意識を高めるための、進路指導やキャリア支援の拡充が行われている（谷田川，2012；中央教育審議会，2011）。キャリアは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」（文部科学省，2004）として定義されている。大学生という期間は、学業への従事に加えて、キャリアに関する意識を高め、卒業後の社会生活へと移行する準備を行うことが重要な課題となっている。学生の進路・職業選択に関する研究結果や知見をもとに、大学における学生の主体的な進路決定に必要な支援策が検討、実施されているが（松井，2014）、海外留学が人々の進路や職業選択に与える影響に焦点をあてた調査は不足している。世界で活躍できる人材の育成が大学の役割として認識される中、留学経験者に対するキャリア支援を充実させるため、海外留学者のキャリア発達に関する研究が不可欠となっている。

本稿では、短期海外留学が、参加者の進路や就職に対する意識にどのように影響を与えたのか、留学後に実施したインタビュー調査の分析結果を報告するとともに、グローバル人材の育成を目指す大学における、留学経験者のキャリア支援充実に有益な知見を提供することを目的とした。

2. 先行研究

短期留学経験が参加者に与える影響についての調査は、国内外で実施されている。米国では、Chieffo・Griffiths（2004）が、5週間の短期留学の参加者と、米国内で異文化理解に関する授業を受講した学生に対する大規模なサーベイ調査を実施した。その結果、短期留学参加者の方が未参加の学生よりも、自己評価に基づく異文化アウェアネス（異文化についての意識、個人的な成長・発達、世界の相互依存に関する意識、世界の地理や言語に関する知識）が高いことが明らかになった。Kurtら（2013）は、3-4週間の短期留学プログラム参加者に対して、留学前・留学中・留学後グローバルな意識に関する項目についての調査を行った。調査結果を留学前後で比較した結果、特に、世界に関する実用的な知識の習得面での自己評価の伸びが大きかったことが示された。一方、短期留学に関する先行研究の中には、留学経験者と留学未経験者とを比較して、差が見られない場合や、長期留学参加者と比べると、得られる効果が低いとする調査結果も報告されている。例えば、KehlとMorris（2008）によると、8週間以内の短期留学経験者と留学未経験者にGlobal-mindedness Scaleという異文化に関する意識についてのアセスメントツールを実施したところ、スコアに有意な差が見られなかった。短期留学の効果は、そのプログラムの構成や、学生個人の要因など、様々な変数によって異なると見られ、さらなる検証が求められている。

短期留学参加者に対する調査として、日本国内では、宮本（2012）が、短期留学前後の参加学生の語学テストのスコアを比較し、留学後のスコア向上の結果から、短期海外留学の語学面での効

果を示した。野水・新田（2014）は、留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）を利用した3ヶ月未満の留学経験者を含む対象者に対して、海外留学・研修の効果について調査を行い、特に、外国語への慣れ、外国語学習へのモチベーションの高まり、異文化コミュニケーション能力や異文化理解の向上、視野の拡大において、回答者の8割以上が肯定的に自己評価したことを報告した。さらに、野水・新田（2014）は同調査で、留学経験がキャリアに及ぼす影響として、3ヶ月未満の留学経験者の8割以上が、留学経験が自身の学業・就職活動に役立ったと回答し、6割以上が、留学経験が自身の進路や就職に関する意識を向上させたと回答した。ただし、留学中のどのような経験がそのような影響を与えたのかということについては、調査の対象外だった。「グローバル人材」の育成に向けたより効果的な留学プログラムを開発するためにも、短期海外留学のどのような経験が参加者の進路や就職に影響を与えるかについての調査が不可欠である。

3. 研究方法

3-1. インタビュー調査に基づく質的分析

本調査では、短期留学経験が参加者の進路や就職に関する意識に与える影響について、参加者の視点からの理解を深めるため、インタビューを実施し、質的な分析を行った。インタビュー手法は、参加者本人の見解に到達する上で、有効なデータ収集の手法である（Rubin・Rubin, 1995）。留学を通じた個人の進路・就職に関する意識の変化が、なぜ、どのように起きるのかを探索する上で、インタビューデータに基づく質的分析が適切な研究手法であると判断した。

3-2. 理論的背景

個人の進路選択に関する理論は、キャリア心理学の分野で先行研究が積み重ねられており、大学のキャリア支援においても活用されてきた。Super（1957）は、個人が人生を通じてキャリアを発達させ、変化していく点に焦点を当て、キャリア発達理論を提唱した。Superら（1996）は、人々が職業における自己を確立するためには、自己概念を形成し、それを職業に当てはめ、実現することが重要であるとした。自己概念とは、『個人が自分自身をどのように感じ考えているか、自分の価値、興味、能力がいかなるものかということについて、「個人が主観的に形成してきた自己についての概念（主観的自己）」と「他者からの客観的なフィードバックに基づき自己によって形成された自己についての概念（客観的自己）」の両者が、個人の経験を統合して構築されていく概念』である（岡田, 2007, p.32）。自己概念は多面的であり、キャリアに関する側面がキャリア自己概念である（岡田, 2007, p.32）。岡田（2007）によると、Superのキャリア自己概念は、自己と他者、自己と複数の環境との相互作用の中で修正、調整されるものである。キャリア自己概念は、自分自身や環境について探求すること、自己と他者の違いを把握すること、様々な役割を観察または担当すること、担当した役割の結果を他者がどう認識しているかについての自己認識との相互作用によって、統合と妥協を繰り返しながら形成されていく（岡田, 2007）。

キャリア発達理論を展開した Super（1957）は、キャリアの発達段階過程を「成長期」（0-14 歳）、

「探索期」(15-24 歳)、「確立期」(25-44 歳)、「維持期」(45-64 歳)、「下降期」(65 歳以上)として概念化した。このキャリアの発達段階によると、大学生の年齢に対応する 15-24 歳は「探索期」に相当する。この期間には、キャリア自己概念を探求し、確立させていくことが課題となる (Super et al., 1996; 岡田, 2007)。大学生は、自分自身の職業に関連した特性や志向に対する主観的また客観的な認識を深めるとともに、他者や環境との相互作用を通じて、自らのキャリア自己概念を深化させていくことが求められている。本調査では、以上のキャリア発達理論を背景とし、短期留学参加学生の進路職業や進路に関する意識の変化について考察した。

3 - 3. 短期海外留学プログラムの概要

本調査の対象者が参加した短期留学プログラムは、某大学で冬学期の 2 単位の科目として開講され、9 月下旬に参加者の募集・選考が行われた。参加学生は、10 月から 2 月上旬までの間、8-10 回程度の事前研修を経て、2 月下旬から 3 月下旬の 4 週間、協定校であるオーストラリアの大学に留学した。当該プログラムへの参加者は、某大学を含む日本の数大学から派遣される学生であった。参加希望者に対する英語スコアによる語学要件は設定されていなかった。当該プログラムは留学未経験者や英語に自信がない学生が、海外という不慣れな環境でも活躍していくことのできる力を養うことを目的としていた。留学中の授業では、英語でのコミュニケーション能力向上のため、スピーキング、ディスカッション、プレゼンテーションの機会が豊富に取り入れられていた。また、学生は現地の家庭にホームステイをし、英語で意思疎通を行った。滞在中には、現地の教育機関や福祉施設への訪問や、文化理解のためのイベント、訪問先大学の日本語学習者との交流機会も設けられていた。

3 - 4. 調査対象者

調査対象者は、2015 年 2 月下旬から 3 月下旬に 4 週間、当該短期海外留学プログラムに某国立大学から参加した学部生 11 名のうち、帰国後 3 ヶ月後から 5 ヶ月後の時点で任意でインタビューに応じた 9 名 (男性 6 名、女性 3 名) である (詳細は表 1 を参照)。留学参加時の学年は、1 年生が 2 名、2 年生が 6 名、4 年生が 1 名だった。全ての調査対象者が、海外生活経験を積みたいということを参加の目的としていた。さらに、8 名が英語能力を向上させたいということを参加目的として挙げ、そのうち 7 名が英語力の向上について、仕事上での必要性和結びつけて考えていた。また、参加者のうち 5 名は、留学経験自体を就職活動や将来の仕事に活かすことを目的として掲げていた。その他の目的として、個人としての成長 (1 名) や、長期留学の準備 (2 名) も挙げられていた。

表 1 調査対象者の詳細

カテゴリ		学生 ID
性別	男 女	1, 2, 3, 4, 5, 6 7, 8, 9
学年	1 年次 2 年次 4 年次	1, 2 3, 4, 5, 6, 7, 8 9
参加目的	海外生活経験を積むため 英語を上達させるため 就職活動や将来の仕事に活かすため 個人としての成長のため 長期留学の準備のため	全員 1, 2, 3, 5, 6, 7, 8 ^(注) , 9 1, 4, 5, 6, 9 4, 6, 9 2, 3

注：学生 8 以外は、英語力の上達を、仕事上での必要性と関連付けていた。

3 - 5. データ収集・分析

調査参加に興味を示した学生に対して、コンセントフォームに基づき調査の概要について説明し、個別にインタビューの実施と録音、インタビューデータの分析への利用について承諾を得た。調査対象者に対して、60 分程度の半構造化インタビューを対面で個別に行った。インタビューは、大学の教室や研究室などを使用して実施した。質問項目のうち、進路・就職活動に関連した項目は以下の通りである。

表 2 インタビュー質問項目例

1. 短期海外研修に参加した目的はどのようなものでしたか？
2. 短期海外研修に参加した目的の中で、将来の仕事やキャリアなどに関連したものはありましたか。（もしあれば、）それはどのようなものですか？
3. 短期海外留学の結果、自分の将来の仕事やキャリアについての考え方に何か変化はありましたか。（もしあれば、）短期海外留学中のどのような経験が、その変化に影響を与えていると思いますか？

インタビューは著者所有のノートパソコンに内蔵されたソフトウェアを用いて録音した。インタビューのデータの文字起こしは、業者に 1 本依頼し、残りは著者が行った。

文字起こしをしたインタビューデータを HyperRESEARCH という質的分析ソフトウェアを用いて分析した。その際「絶えざる比較 (Constant Comparisons)」という分析戦略を用いた。絶えざる比較は、Glaser と Strauss (1967) によって確立され、質的分析を基に理論構築を行うグラウンディッド・セオリーというアプローチの理論構築前の段階で、データを帰納的に分析する手法である。ただし、必ずしも理論の構築を目的としていない基礎的な質的分析においても、データの分析手法として多く用いられている (Merriam, 1998)。絶えざる比較では、書き起こしたインタビューデー

データを意味のある塊ごとに断片化し、見出し（コード）をつけ、別の断片や資料と比較し、共通するテーマを持つデータをグループ化し、グループに名前をつけ、グループ間の関係性を考慮しながら、カテゴリを形成し、概念化していくという作業を継続して行った（Merriam, 1998; Corbin・Strauss, 2014）。既存のグループに、新たなデータの断片を比較に加えていく過程では、既に形成したグループの再検討が行われた。その際は、データを既存のグループに統合する場合や、新たなデータの断片を包括する新しいグループを構成する場合、または、グループの分類法自体を変更するという作業を繰り返しながら、全てのインタビューデータの断片を検証した。本調査の分析過程においては、特に、本調査の目的とする就職に関する意識の変化について、変化の結果・変化の理由に関連した発言に着目して、コード付けを行い、グループ化していった。さらに、理論的背景とした Super のキャリア自己概念との関連も念頭に起きながら、関連する発言を検討した。コードからグループを形成し、グループを統合、再構成を繰り返した結果、本調査の焦点である、短期留学を通じた就職や進路に関連した意識への影響として3つのテーマに帰結した。それらは、(1) 海外生活に対する自信の獲得による海外への心理的な抵抗の弱まり、(2) 海外生活を通じた海外・国内に関する志向の吟味、(3) 現地での他者との交流による自己理解の深化、である。次項では、それぞれのテーマについて詳しく述べる。

4. 分析結果

4 - 1. 海外生活に対する自信の獲得による海外への心理的な抵抗の弱まり

短期海外留学経験が、参加者の就職や進路に関する意識に与えた影響の一つに、参加者は、異国の地で生活経験が自信となり、海外に対する心理的な抵抗を弱め、国際的な場面での仕事に関わる自分を想像できるようになったことが挙げられる。当該短期海外研修プログラムは、1ヶ月という比較的短い期間であり、現地の授業は日本からの留学生対象としたものであったにもかかわらず、これまで一人で海外生活を送ったことのない学生にとっては、大きな挑戦であったと言える。ある学生は、短期留学を乗り越えたという経験が糧となり、英語を使うことや異文化の中で生活していくことに対する自らの心理的な壁を克服しつつあると認識していた。

1ヶ月間、本当に一人で異国の地で過ごしたっていうのは、その事実だけでも割と自信になっています。どこかで、あれを乗り越えられたっていうか、楽しいこともあったし、大変だったこともあったし、辛いこともあった中で、その1ヶ月を乗り越えられたことは自信につながっているかなと思いますね。1ヶ月間やったという自信が、英語の自信とかにも繋がっているかもしれないし、…。だんだんいろいろなもののハードルが下がってきているという感じですかね。
(学生 6)

別の学生も、英語の使用に対する自信の高まりと、海外生活への適応経験から、将来の仕事におけ

る海外での勤務を以前よりもイメージできるようになったと語っていた。

一つ、自分の英語がある程度は通じたと言うことが大きな自信で、急激な環境の変化、最初やっぱり1週間はしんどかったんですけど、次第に慣れていきましたし、今回1ヶ月という、まあちょうど慣れてきたところで、終わりというところではあったんですけど、海外勤務ということになると年単位、これが続いていくとなるとまあ、なんとかなるかな、みたいなあとは…、想像ではあるんですけど。(学生1)

これらの学生のコメントにみられるように、実際に現地で生活し、学校に通い、試行錯誤をしながら乗り越えた海外経験は、参加学生にとって大いに自信をもたらした。短期海外留学の参加経験は、それまで自分で乗り越えられるかわからなかった、海外で生活を送るという課題を、実際に乗り越えられたという成功体験に変えることで、海外生活をより身近なものとする作用が見られるようである。

短期海外留学を通じた海外生活や英語でのコミュニケーションにおける自信の獲得は、参加学生の国際関連の仕事に対する抵抗を弱めたことによって、就職先の候補を広げるという形でも参加者の意識に影響を与えていた。英語が通じたことで自信を深めることができたと言った学生は、就職先でも海外での業務も視野に入れることができるようになったと述べていた。

行く前は就職するにしても、日本で完結する企業がいいなあっていう風に思っていたんですけど、…ある程度海外に出ていっても、かつて自分が思っていたほどの抵抗はなくなっているかなとは思いますね。海外で働くことに対する抵抗っていうのは薄れているかなって思います。(学生1)

また、別の学生は、それまで留学未経験という自分自身にコンプレックスを抱えていたが、短期留学で得た自信により、将来海外勤務や国際関連の業務にも対応していけるという実感を強めたと語っていた。

それこそ行く前は、コンプレックス的なことで、できればあまり海外に出たくないという感じだったので、それが、そこに対する怖さがなくなったことで、企業選びの幅も広がったし、もっと大きな話でいうと、自分の可能性みたいなことですかね、仕事で達成できる範囲、というものも広がったという感じですね。(学生9)

短期留学経験を通じて、参加者は、英語でのコミュニケーションをすることや、海外生活を送ることができるといった実感を得ることができていた。その結果、将来的に海外勤務を行うことに対する

心理的な壁が低くなり、就職先の候補や担当できるとする業務の幅が広がったという形で、参加学生の進路や就職に関する意識に影響を与えていた。

4 - 2. 海外生活を通じた国内・国外に関する志向の吟味

次に、オーストラリアにおける生活経験を通じて、参加者が将来の勤務地の希望を明確化していたことも、短期留学を通じた就職や進路に関する意識への影響として挙げられる。参加学生たちは、これまで実際に住んだことの無かったオーストラリアという環境について、自らの生活経験を通じて、その文化や風土についての見識を広げることができた。そして、日本の文化や生活経験と対比させ、将来の仕事と関連して自分の好みを吟味し、それを語る事が可能となっていた。ある学生は、短期海外留学を通じて、現地での肯定的な経験から、将来の仕事でも海外に関連した仕事に就くことに意欲的になったと語った。

日本の中だけで仕事をするのはしたくはないなって思って、今回の留学は多分楽しかったからというのがあと思うんですけど。…日本よりも自由な雰囲気、自然がすごい豊かとか、そういうところですかね。…それでいいイメージを持ったから、海外で働きたいというのにつながると思います。(学生3)

この学生の場合、オーストラリアの自由な雰囲気に対する前向きなイメージが、将来の海外における仕事を検討するきっかけとなったとしていた。別の学生は、日本の中にある独特の文化やコミュニケーションスタイルよりも、海外での交流スタイルの方が自分に合っていると感じたことから、海外をベースとしたキャリアを意識し始めていると言及した。

海外に行ったことによる日本の粗みなどが見えて来て、逆に、日本よりも海外で英語ができて、そのコミュニケーションもとれるようになった以上、海外の方に視野を広げるというのもアリだな、と言うふうに考えるようになりました。…空気を讀んだコミュニケーションとか、そういうものも、あまり自分はそういうのが好きではないなと思ひまして。(学生2)

以上のようなコメントに見られるように、海外志向が強まったとする学生がいる一方で、逆に、海外経験を経て、日本文化の良さや、日本の環境の方が自分に合っていると再認識し、将来的には日本を拠点にしつつ、国際関連の仕事や、英語を使う仕事に就きたいと語った学生も存在した。

外国に行ってみて、日本の便利さとか、日本人の真面目さだったりとか、日本のいい面を再確認できた面があったので、将来的にはやっぱり日本で働きたいなっていう、そっちの面での変化があったかもしれないですね。…ただし、前は日本人だけっていう職場のほうが安心だっ

て思っていたんですけど、そこに外国人がいてもべつに抵抗がないなって思ってきて、外資か日系かっていう選び方ではなくて、本当に自分がやりたい業界かとか、やりたい仕事かの基準で、そこにたまたま外資系であったらそこでもいいし、日系であったらそれでもいいしって思えるようになってきましたね。(学生 6)

国外や国内志向という相違はあるものの、参加学生は、短期海外留学経験を通じて、日本と海外の文化や交流スタイルの違いを実際に体験しながら、留学先と日本という国レベルでの比較を行っていた。それによって、それぞれの自身の特性や好みにあった勤務地について、留学前よりも具体的にイメージすることが可能になっていた様子が伺えた。

さらに、オーストラリアにおける短期海外研修の経験から、先進国や途上国を含むオーストラリア以外の海外環境における勤務の可能性も検討した学生も存在した。例えば、過去の海外旅行先と今回の短期留学先の三者での比較が可能になったことで、海外環境の中でも自分の適応度合いが異なることを認識した学生がいた。

私は特に、食べ物の好き嫌が多いので、海外で暮らすに当たって食生活が一番のネックだったんですけど、まあ、オーストラリアぐらいだったら暮らせるかな、というのが実感できました。私は最初に行った海外がマレーシアだったんですけど、マレーシアに一週間か十日ぐらい行って、三食ぐらいしかご飯が食べられなくて、初海外で、散々な海外だったので、もう、海外に行かなくていいやって思っていたんですけど、今回はその悪いイメージが払拭されたというのが大きかったですね。(学生 7)

過去に途上国における、苦い海外旅行経験があるというこの参加者は、オーストラリアという環境であれば自分が生活していけるということを体感した。そのことによって、先進国であれば、海外出張や旅行などにも積極的に出ていきたいと、後のインタビューの中で語っていた。別の学生は、途上国を含む、オーストラリア以外の環境にも、機会があれば挑戦することに意欲的になっていた。

行った場所がオーストラリアなので、もしかしたら、もっと開発途上国で、もっとインフラも治安も整っていないところがあったら、自分が音をあげちゃうんじゃないかなって言うのはちょっとあるんですよ。もちろんそんなに、先進国だけ行きたいということは通用しないので、そこは思い切って飛び込んでいかなきゃいけないのかなって。前はもうちょっと慎重で、海外ってどんなところなんだろうみたいなのが強くて、不安の方が大きかったので、まあ今は、オーストラリアと違う国を見に行く機会があったら、また、日本とその国だけじゃなくて、その国とオーストラリアも比較できるから、もっと面白いんじゃないかなということは今を考えています。(学生 4)

短期海外留学の参加者は、先進国であるオーストラリアという限られた環境ではあったものの、その留学中の経験から、自らの海外または国内という、国レベルでの志向や、先進国・途上国という違いについても想像を巡らすことで、自分により適合した環境と、将来の仕事上で関わりたいとする程度についてのイメージを精緻化することができていたようである。

4 - 3. 現地での他者との交流を通じた自己理解の深化

さらに、参加者は、短期海外研修経験を通じて、海外や異文化という環境の中で振る舞う自分を観察することや、他者とのやり取りの中で自分自身を見つめ直すことによって、自分の特性や志向についての理解を深めることができていた。自分自身を知ることは、将来の進路や就職先を決めて行く上で役に立つ変化である。ある学生は、オーストラリアという馴染みのない環境の中で、自分がどのように行動するのか注目することによって、自分を知る良い機会となったと振り返っていた。

自分の中でも自分の性格を見つめなおしたりとか、新たな環境に入ってみて、自分がどうやって行動するのかによっても、自分の性格ってこういうのだったんだ、みたいな気づきもあるので、そういった面で、自己分析ではないですけど、そういった面には繋がるかなって思う。(学生 8)

別の学生も、海外という予想できない環境の中でこそ、自分の行動特性が現れるため、留学は自分の普段は意識することのできない自分の姿を認識する良い機会となり、就職活動においても活かすことができるという可能性を語っていた。

予想外のこととか、ハプニングみたいなのがあるときに、自分はどうするタイプの人間なのかみたいなのがちょっとわかったのがありますね。それは日本の中では経験しにくいので。日本では、あまり、ピンチに陥らない生活をしたので、辛いこととか予測不能なことがあったときだからこそ、自分の特性が強く出るのかなって思いますね。そういう自分の内面を理解したのは、就職活動の方向性を決める上で役に立った気はしますね。(学生 9)

短期海外研修中に直面した様々な小さな課題は、それらを乗り越えたこと自体が自信になるだけでなく、そういった課題に対して、自分はどうやって対峙し、解決を試みるのかということを考察する機会となっていた。参加者たちは、そのような機会を経て促された自己分析が、自身の将来の進路選択にも活用しうるものであると認識していた。

さらに、短期海外留学中に、周りの他者との比較を行うことも、自己に関する認識を深めるのに役立っていた。ある学生は、他大学からの参加者を含めたクラスメートと自分との違いを観察することによって、同じ日本人の中でも、自分がどのような特性を持っているのかを理解できたと述べ

ていた。

クラスメートはいろいろな大学から来ていて、英語力にも、将来どうするかというのばらつきがあって、そんな中で自分がどういう立場にあって、どういう物が他の人よりも優れていて、どういう点で他の人よりも劣っているのかっていうのを、特に、海外っていう状況下で、他の人より率先してできているとか、海外でも臆せず道を聞けるとか、自分で価値判断をつけていけたというのがやっぱり大きかったですかね。(学生 7)

同年代のクラスメートとのやりとりを通じて、語学力や将来像における差異を認識し、自分の立場を確認することで、自らの海外における特性を理解するのに役立っていった様子が伺える。さらに、別の学生も、クラスメートたちとのやり取りの中で、グループの中で自分が果たす役割の傾向を分析することによって、自分の苦手なことや得意なことを認識するきっかけになったと語った。

行く前は、見知らぬ環境でリーダーシップ的なものが身につくかと、漠然とは思っていたんですけど、今考えてみると、結構、友達がここに行きたいって言ったら、それに付いていく感じが結構あったので、意外と自分はリーダーシップがないんだなっていうのをすごく感じまして。…逆に、書くことについては、得意というか、好きっていうのがありまして、英語でプレゼンをやると、しどろもどろになっちゃったりしてうまく話せなかったんですけど、エッセイとかだと、バリバリ筆が進むっていうか、…書くっていうことに対して、すごく縁があるのかなみたいなのを感じました。(学生 4)

以上のようなコメントに見られるように、クラスメートの学生との授業外でのやり取りや、授業内での課題への取り組み方から、参加学生は、海外環境という文脈における、自分の得手不得手について、より具体的に把握することができていた。そのような自己分析の深まりは、将来の進路を選択していく上で、意義のある気づきとなったようであった。

5. 考察

5 - 1. Super のキャリア自己概念の発達という視点からの解釈

本調査で得られた分析結果を、Super のキャリア自己概念の発達という視点を通じて再検討してみると、短期留学中の経験は、キャリア自己概念の中でも、特に、主観的自己（個人が主観的に形成してきた自己についての概念）の発達に関連した変化をもたらしていたと解釈できる。まず、参加者は、オーストラリアという馴染みの薄かった環境について、実体験を通じた知見を積み重ねたことで、より正確に捉えることが可能となった。その上で、参加者は、海外という環境の中で、自らの英語能力を確認し、生活上の課題解決を積み重ね、他者と自分との比較を行う中で、自分がど

のような者であるか、どのような環境で生活や仕事をしていきたいのか、という主観的な自己に関する認識を深めていった。そして、参加者たちは、短期留学を通じて、海外環境への心理的な壁の低減、海外・国内志向の好みの明確化、他者との比較からの自己理解の深化という形で、就職や進路に関連した自己の意識変化を経験し、より精緻なキャリア自己概念を形成していったと理解することができる。

以上のように、短期留学経験は、参加学生のキャリア自己概念のうち、主観的自己に関する発達に影響を与えたと解釈できるが、客観的自己（他者からの客観的なフィードバックに基づき自己によって形成された自己についての概念）についての発言は欠如していた。岡田（2007）によると、キャリア自己概念は、環境を知ること、自己観察、他者との違いの認識、役割の担当や観察に加え、他者が自分をどのように捉えているかを知ることによる、自己と他者の認識の相互作用を通じて、発達していくとしている。しかしながら、当該短期海外留学プログラムにおいては、参加者が、自己の特性や、自身に適した勤務地・職業に関する他者からのフィードバックを受け、客観的自己を発達させる機会と、それにより主観的な自己認識との相互作用を促進する機会が限られていたと解釈できる。より発達したキャリア自己概念を導くためには、主観的自己と客観的自己を一致させていくことが重要であるため（岡田，2007）、今後、短期海外留学を通じたキャリア発達をさらに促すためには、自己に関する客観的なフィードバックを受け、自己認識と対比させて、自己概念の深化を促す経験を充実させることが有効であると考えられる。

5 - 2. 短期海外研修を通じたキャリア支援に向けて

分析結果を受けて、短期海外留学を通じた個人のキャリア発達を促すために、幾つかの示唆をまとめる。まず、海外留学はたとえ短期であっても、慣れない海外生活の中での小さな課題を乗り越えたという自信を持つことによって、将来の進路上の海外志向を強める役割を果たしていることが示された。そのため、短期留学のプログラミングにあたっては、留学中に学生が小さな成功体験を積み重ね、海外での生活に自信を獲得していけるよう工夫をすることが重要である。Sanford(1967)は、Challenge and Support 理論として、学生の成長には、自分自身での解決できる程度の課題の設定と、必要な支援の提供のバランスをとる必要があるとしている。短期海外研修においても、すべての支援をお膳立てするのではなく、参加者自身が自力で乗り越えられる課題には、自ら乗り越えていくように促し、そのような経験から培われた自信が、将来の仕事上で、海外における業務を志し、対応していく意欲を養う上で役に立つと考える。

また、参加者は短期海外留学中のクラスメートとの交流や活動を通じて、主観的に自分自身の特性に関する認識を深め、将来の進路選択に役立つ自己分析の機会とすることができていたが、客観的なフィードバックを受け、他者との相互作用をもたらす仕組みが限られていた。今後はさらに、留学前後の研修時において、キャリア上の自己理解を促進できるよう、自身の特性を振り返る機会を提供するだけでなく、クラスメートと互いに所見を交換し合い、客観的に吟味できるような機会

を取り入れることで、留学を通じたキャリア発達につなげることも可能である。また、クラスメート同士の交流に加え、短期留学中に、異文化理解や将来のキャリアの参考となるような現地の人との交流機会を、積極的に組み込んでいくことも検討されるべきである。以上のような工夫によって、短期海外研修を通じた経験を、将来の就職活動や進路選択においてより有意義に生かすことが可能となると考えられる。

6. おわりに

本調査から、短期海外留学経験は、参加者の海外への抵抗感を減らし、自らの将来の勤務地に関する吟味を行い、自己分析を深化させるという点で、キャリアに関する意識に影響を与えることが示された。このことから、現代の日本の大学に求められているグローバル人材の育成にあたり、短期海外研修プログラムの果たす役割は大きいと考えられる。本調査は、某大学からの十名弱という小さなサンプルに基づいた考察という限定的なものであったが、今後は、別の大学や別の留学プログラムが参加者の進路に与える影響について、調査研究が行われていく必要がある。

参考文献

- Chieffo, L., & Griffiths, L. (2004). Large-scale assessment of student attitudes after a short-term study abroad program. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 165-177.
- Corbin, J. M., & Strauss, A. (2014). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (4th ed.). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago, IL: Aldine Transaction.
- Kehl, K., & Morris, J. (2008). Differences in global-mindedness between short-term and semester-long study abroad participants at selected private universities. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 15, 67-79.
- Kurt, M. R., Olitsky, N. H., & Geis, P. (2013). Assessing global awareness over short-term study abroad sequence: A factor analysis. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 23, 22-41.
- Merriam, S. B. (1998). *Qualitative research and case study applications in education*. San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers.
- Rubin, H., & Rubin, I. (1995). *Qualitative interviewing: The art of hearing data*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Sanford, N. (1967). *Where colleges fail: A study of the student as a person*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Super, D. E. (1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development*. Harper.
- Super, D. E., Savickas, M. L., & Super, C. M. (1996). Life-span, life-space approach to careers. In D. Brown & L. Brooks (Eds.), *Career choice and development: Applying contemporary theories to practice* (3rd ed., pp. 121-178). San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- 岡田昌毅 (2007) 「ドナルド・スーパー 自己概念を中心としたキャリア発達」 渡部三枝子 (編) 『新版キャリア』

- アの心理学：キャリア支援へのアプローチ』ナカニシヤ出版、pp.23-46.
- 工藤和宏（2011）「短期海外研修プログラムの教育的効果とは：再考と提言」『留学交流』第9号、pp.1-10.
- 首相官邸（2013）『日本再興戦略：Japan is back』http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf（2015年12月30日アクセス）
- 谷田川ルミ（2012）「戦後日本の大学におけるキャリア支援の歴史的展開」『名古屋高等教育研究』第12号、pp.115-174.
- 中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf（2015年12月30日アクセス）
- 日本学生支援機構（2006）「協定等に基づく日本人学生の海外派遣状況（平成16年度版）」http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/_icsFiles/afieldfile/2015/10/08/short_term04.pdf（2016年2月9日アクセス）
- 日本学生支援機構（2015）「平成25年度協定等に基づく日本人学生留学」http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2014/_icsFiles/afieldfile/2016/01/28/short_term13.pdf（2016年2月9日アクセス）
- 松井桃子（2014）「進路選択研究の統合的理解とその課題：大学でのキャリア支援に向けて」『京都大学高等教育研究』第20号、pp.63-72.
- 宮本美能（2012）「超短期プログラムのポテンシャル：A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一時例考察」『留学交流・指導研究』第15号、pp.77-87.
- 文部科学省（2004）「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書：児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm（2015年12月30日アクセス）
- 文部科学省（2015）「日本人の海外留学状況」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2015/03/09/1345878_01.pdf（2015年12月30日アクセス）
- 野水勉・新田功（2014）「海外留学することの意義：平成23・24年度留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）追加アンケート調査結果分析結果から」『留学交流』第40号、pp.20-39.